

田中麻紗巳著 『両漢思想の研究』

薄井, 俊二
九州大学

<https://doi.org/10.15017/18104>

出版情報：中国哲学論集. 13, pp.79-91, 1987-10-25. 九州大学中国哲学研究会
バージョン：
権利関係：

〈書評〉

田中麻紗巳著『兩漢思想の研究』

薄井俊二

本書は、漢代を中心として中国古代思想の研究にご活躍中の著者の、まとまった初の論著である。取り上げられているのは、董仲舒から鄭玄・何休まで漢代儒学史上大物とよびうる者はほとんどであり、また道家思想にも目を配ったものとなっている。一時に書かれたものではなく、十数年間に亘って順次発表された独立する十六本の論文を補訂・修正されたものであるので、評するに当っては各々の論について紹介し、評者なりの意見を述べさせて戴くことにする。

まず本書の構成を見る為に目次を掲げる。

序 説

第一章

序

第一節 董仲舒を中心にした漢代の自然観

第二節 『春秋繁露』考察

一 五行諸篇

二 離合根等三篇

第二章 劉向・楊雄

序

- 第一節 劉向の災異説
- 第二節 楊雄と王莽・新
- 第三節 『法言』と春秋学
- 第三章 後漢の儒学
- 序
- 第一節 『白虎通』の三綱説
- 第二節 賈逵の思想
- 第三節 許慎と古文学
- 第四節 鄭玄「笈墨守」等三篇の特色
- 第四章 何休の思想
- 序
- 第一節 兩漢の外戚観と何休の解釈
- 第二節 「進」からみた夷狄観
- 第三節 災異解釈
- 第五章 道家思想
- 序
- 第一節 「鵬鳥賦」と『莊子』
- 第二節 武帝期の黄老派汲黯
- 第三節 後漢の道家思想
- あとがき

「序説」 本書の中で、この「序説」のみが書き下ろされたものである。ここでは思想史上における兩漢時代の位

置づけ、意味づけが考察されており、併せて著者のこの時代の思想に対する全体的な視点が提示されている。

まず、秦漢帝国成立より明の中期（王陽明以前）までを中世思想とみる赤塚忠説、「淮南子」までを子学時代、董仲舒以降を経学時代とする馮友蘭の旧説・武内義雄説を紹介、批判し、儒学を中心に考えたと「兩漢四百年は、儒学が漸進的に発展して一つの完結に至る時代」（p6）ととらえられ、秦の法家独尊・儒学断庄と魏晋の玄学中心という儒学から見ればやや異質な時期には含まれていることから、兩漢の時代は一つのまとまりを持った時期と考えることが可能であろうとする。

また「兩漢の思想界が流動性の乏しい固定的な世界に見える」という見方に対しては、漢代は諸子百家の時代に比して統一国家としての体制の整備された社会であり「思想が体制社会の中で役割りを与えられ、又、存在意義を問われた」（p6）時代であり、こうした思想をとりまく環境を考慮に入れて評価すべきだとする。

ここで当然問題となるのは、兩漢時代において思想が与えられ、果たした役割りとは具体的にはどういうものであり、それはどう評価されるかということであろう。この点、本書をまとめるとみられる「序説」には著者の考えが明言されていない。各論の中から読者がそれぞれ読み取るべきものかもしれないが、著者の考えをもっと力説し明記して欲しかったところである。

「第一章 董仲舒と『春秋繁露』」

「董仲舒を中心にした漢代の自然観」は、客観的・科学的とされる見方に対比されて、決して高くは評価されていない漢代の感応説・自然観を、董仲舒のそれを中心として改めて検討し評価したものである。まず董仲舒説を『春秋繁露』同類相動篇から探る。彼は、陰陽を共有する自然と人間との間には等質性——全体性があり、相互的な働きかけが必然的に可能だと考えていた。「共鳴現象の持つ必然性と相互性から一見、演繹的に降雨と人間に共通する陰陽の感応のそれ」（p16）を導き出し、「降雨は制御可能という結論に至るのである。」（同）しかしこの推究は「科学的・客観的に見れば、現象の質的差異の認識に欠けた、厳密さの不足した推論」（同）であり、しかもこうした不完全ながらも機械的機構で自然を考える一方、天に救いを求めてもおり、彼の自然観は確かに非合理的なまままで終っている。そして董仲舒があえて荀子に逆行するようなこうした見方に立ったのは、彼が「人間生活を脅かす旱魃・水害などの自

然災害から免れたい、という切実な願いに正面から答えようとした「現実重視の姿勢に根ざし」(p19)ており、人間を包み込んだものとして自然を見るという複合的・有機的な認識、また実践と不可分な認識によっていたためだとする。そして彼のこうした全体的・能動的・自然観は、「讖緯の神秘主義」と「王充の合理主義」のいずれにも属さないで、災異解釈の一理論として劉向・班固・王符らに継承されてゆき、結局実効は挙げえなかったが、「実践との結びつき、自然との全体での人間の理解、そして陰陽による二元的解釈」(p27)といった点で古代中国医学の基本認識の形成に寄与したと評価する。著者らしい緻密な考証により、「合理的」ということの意味を洗い直したのもと言えよう。

「『春秋繁露』考察」は、従来董仲舒の原著であるのか疑義がさしはさまれていた『春秋繁露』について、その一部に検討を加え董仲舒との結びつきを考えたものである。

まず「五行諸篇」では、主として五行について述べている九篇を取り上げ、五行対第三十八・五行之義第四十二・五行相生第五十八・五行相勝第五十九を前四篇、五行順逆第六十・治水五行第六十一・治乱五行第六十二・五行変救第六十三・五行五事第六十四を後五篇とする。そして前四篇は五行相生・相勝説を用いて徳目・官職を説くものであり、『漢書』董仲舒伝や『塩鉄論』論蓄篇にみられる彼の説との関連があり、彼との結びつきが少し考えられる。しかし後五篇は相生・相勝の考えを採用せず、ほぼ時令説を用いて災異を言い、むしろ『尚書』系の災異解釈に近く董仲舒との結びつきは見当らないと結論する。本論は本書所収の中では最も早く発表されたものだが、緻密で慎重な著者の研究態度が色濃く出ている手固い論である。

次の「離台根等三篇」は、道家的・法家的色彩の濃いとされる離台根第十八・立元神第十九・保位権第二十の三篇を取り上げる。この中で説かれている君主の「神」であり無為であるあり方は「君主が自己を蔵匿しながら臣下の特質を正確に掌握する神秘的な機能を保ちつつ、掌握した臣下の特質を最大限に利用して効果的に委任し、そして成功を確実にする」(p54)、「実利的とも呼べそうな君主のあり方」(p59)であると分析する。そしてこの考えは、漢初の黄老思想と関係する『韓非子』揚権篇・馬王堆漢墓帛書老子乙本卷前古佚書・『淮南子』主術篇に近いものであったとする。更にこの三篇には董仲舒の対策文に比べ客観性や思索の深さでやや劣るものの「道義を重視する儒家的な思

考」もあつたとし、こうした黄老的思想、儒家的思想の混在する三篇は董仲舒の若年の著述であらうとする。そしてこの二つの思想の深化・進展が「天が儒家的理念を踏まえて、地上の権力者を制御するという」(p.65)後の天譴説へつながるとする。

従来あまり手のつけられていない『春秋繁露』本文に検討を加えた本論は、誠に有意義なものといえようし、『春秋繁露』に董仲舒の思想変遷の反映があるというところさえ方も、示唆に豊んだものだといえよう。

「第二章 劉向・楊雄」では、前漢末・新の大儒劉向と楊雄を取り上げているが、両者を全体的・概括的に論ずるというよりは、彼らの思想の一端を、その特徴的な面から摘出し考察したものである。

「劉向の災異説」は、時代的に董仲舒と讖緯思想盛行の中間に位置する劉向の災異説を、その機構と機能の両面から考察したものである。まずその機能は、『洪範五行伝』・象数易・陰陽(氣)・天の四つの理論の組み合わせからなり、「董仲舒などの説に比較して、論証の複雑化・緻密化によって説得力の強化」(p.74)が図られており、「前兆の意味を加えることで、災異の持つ意義を深めている」(同)とする。しかし彼の考えはあくまで過去の事例を解釈するのに前兆を考えるに止まり「当時の予言へ進む傾向を否定して、より客観的な性格を備えよう」と(同)したものであるとする。機能についても「基本的には董仲舒のを継承しており、君主権の確立及び道義に適った為政と行動とを、君主に求めるものであった」(p.76)とする。そしてこうした機構・機能を持つ劉向の災異説は、讖緯説へと流れる前漢後半期の災異説の主流——眚弘以来の「漢王朝が現実を衰退していく状況を踏まえ、それと相関連して発展した」と思える歴運の考えを取り入れ、そして劉氏王朝の命運を考察する」(p.79)もの——とは別の一つの流れとして、魯学派と密接しながら、後漢に古文学が育つ一因になったとする。

本論は曖昧になりがちな災異説の様々な性格を、劉向の立場を一つの基準として明らかにしたものとも言え、本書の中でも最も明解な論の一つであらう。

「楊雄と王莽・新」では、まず楊雄の「劇秦美新」を取り上げ、それは「古文学説に依拠したとされる彼(即王莽——評者)の姿勢、礼教のゆきわたった儒教国家と、大地主の介在を排して直接に自作小農民層を基盤とする社会とを目指すその姿勢」(p.88)を具体的に・歴史的に評価し称えたものであるとする。次に『法言』孝至篇の「漢興二百一十

載、而中天其庶矣乎」という語などの検討を行い、楊雄は歴運の考えによって漢—新の交替を認め、且つ王莽の禅譲を円滑な変動であると肯定していたのだとする。そして楊雄の王莽へのこうした賛同の根底を考察し、彼は自己の不遇と哀帝期の状況への失望から超俗的態度をとるようになり、漢朝の存在への疑念へ、更に新・王莽への期待へとつながったとみる。また彼には道家的思维もみられるが、その思想的立場は、「当時の変動状態への伶俐な観察からくる打算的な意図」(p100)がみられる班嗣等とは異なり、「体制内で生きねばならない儒家的教養が身に浸みた人間」(同)が「道家思想がどういう意味を持ちうるか」(同)を正面から考えたものであって、「根本的な認識の次元で『老子』や『莊子』の思想に依拠しながら、儒家の教理を実践において評価する」(p102)ものであるとする。

本論は、王莽へ接近した為、無節操であると批判される楊雄の立場を、当時の社会・思想状況を配慮して再評価したもので、「序説」に述べられていた「体制内での儒家的知識人の思想と行動」という問題の一つの答えともなっている。また今後行われるべき王莽・新への学術的再評価の先駆的論とも言えよう。

「『法言』と春秋学」は、楊雄の晩年の作とされる『法言』と春秋学との関係を論じたものである。まず「『法言』は『公羊』を正統視してその説を多く採用し、『左伝』の性質を知りながら主に史実に注目し、そして『穀梁』の解釈も理解していた」(p114)とする。そしてこうした柔軟な態度は、例えば「什一」の税に関する見解に「前漢末・王莽期の税法や土地制度に対する自分の意見を表明した、とも推測される」(p109)のように、彼が現実への関心、自分の立場を持っていたことによるとする。

「第三章 後漢の儒学」は、後漢思想史上重要な位置を占めている四つの事柄・人物を考察しているが、次章の何れと併せて、後漢の思想界を本格的に論じた数少ない研究である。しかし、前章と同様、概論ではなく、それぞれの事柄のある重要な問題を論じたものである。

「『白虎通』の三綱説」では、中国において長い間強制力を持ってきた君臣・父子・夫婦のそれぞれの関係を問題とする三綱説を、それが初めてまとまった形で記述される『白虎通』三綱六紀篇を中心に、その思想的系譜ならびに意義を考える。まず『白虎通』の「綱」の考えは二説の流れをうけているとする。一つめは、君父夫はそれぞれ臣子妻の綱(すべまとめ)であり、君臣等は一方的関係であるとするもの。この考えは君臣を第一として君主の一方的

立場を説く『韓非子』忠孝篇等の法家の考えや「『孝経』の説が漢代に継承され、父子そして夫婦も君臣の下に位置づけて強い君主権が父子・夫婦をも貫徹する考えとなり」(p128)、それが礼緯を経て『白虎通』へ至ったものとする。もう一つは、君臣等の関係を陰陽に比擬し、綱(結びつき)により相互的なものとみなされるというもの。この考えは、父子等の関係を道德的・双務的なものと見、君臣と父子との間の関係などはあまり厳密に考えなかった見方が、『春秋繁露』基義篇において陰陽説と結びつけられ『白虎通』に受け継がれたとする。そして「基本的にやはり綱は『天下を張理』する所以だが、この篇(基義篇——評者)は更に「五常」(仁義礼智信——評者)などの觀念を用いて道義的、倫理的にも解釈し、換言すれば儒家的に潤色すると解される」(p133)とし、「君臣などを相互的關係とする見方で、一方的關係とするのを補完しようとする」(同)ものであるとする。

本論は、近年概括的研究が少しずつなされはじめている『白虎通』研究において、その全体像の解明には必要でありながら地味であるが為に後まわしにされていた観のある各論研究に取り組んだ有意義な研究であるといえよう。

「賈逵の思想」では、左伝を讖緯と結びつけその立学を求めた為、「曲学阿世の風」ありとも評される賈逵を取り上げ、学者としての彼の立場の再評価をはかる。まず賈逵が左伝以外の穀梁等にも通じていたこと、また讖緯の利用は当時においてさして特色とは言えなかったことを指摘し、「『左伝』と讖緯との結合によって、賈逵自身や左氏学派が天子の優遇を得ることができたとするのは疑わしい」(p141)とする。そして彼には「儒家の教説を守りながら融通性を持って体制社会に適応しようとする考え」(p145)があり、それが彼の「時には他学派の主張をも採用する態度、及びその結果としての幅の広い主張」につながっていたとする。また確かに後漢には讖緯尊重の風があったが、「後漢前期の人々の熱心な讖緯依拠の底には、冷やかなそれへの認識があり」(p148)賈逵も「讖緯の実態を精確に把握した上でこれを効果的に利用した」(p147)にすぎないとする。また彼は学問などを棄てて現実を逃避する者達に理解を示しつつも、彼らを推挙するなど現実において有為であらねばならないという自覚があった。つまり「賈逵は体制社会において「中庸」の徳などを守りながら、儒学の理念を古文学派の立場から、現実的に柔軟に実現していく途を歩いたものと考えられる」(p152)とする。

本論は前章の楊雄と同じく体制内の知識人の一つのあり方を描いたものと言え、また実際の政治・学問と讖緯との

関係についても示唆に富む指摘がなされている。

「許慎と古文学」では、従来『説文解字』の著者としてしか研究されなかつた許慎の思想を、彼の著である『五經異義』を中心に、当時の經学説との関連から考察する。まず『五經異義』佚文の中から、親迎・逆祀・純臣・世郷・感生の問題をとり出して、今文・古文両説を比較検討し、「『異義』において許慎は、全般的に古文学説に立脚しながら、時には自己の判断に基づく自由な解釈も下し、又、その全体の解釈が実証的であつた。彼は後漢の統治機構と結びつく今文派の主張を批判すると思われた。……自らの考えを古文派らしい実証性と、時には古文説も否定する独自性で支えていた」(p.167)と結論づける。更に許慎が『説文』の本文で讖緯説の解釈に妥協的にも見えるが、実は、彼の師の賈逵の場合と同じく、讖緯説を冷静に認識し、鋭い洞察によって取捨しているとする。そして彼がこうした高い客観性を備えた階段へ至りえたことと彼の比較的低い出自との関連が指摘されている。

「鄭玄「発墨守」等三篇の特色」は、鄭玄が何休の考えを批判した、「箴膏肓」「釈廢疾」の三篇の思想を考察する。まず鄭玄が何休の説を取り入れている場合も、自分の立場に立って折中しての吸収であることを指摘、次いで何休説に反対している「君主・臣下のあり方」の問題の検討を通じて「何休は…いわば一貫して理想主義的な姿勢にあると解された。これに対して鄭玄は、あくまでも儒家的思考の枠内だが、ほぼ実務を重んじる現実的な考えを示していた」(p.186)とする。次いでこの三篇が彼が党錮の列に連なり蟄居させられていた壮年期の作であることから、当時の党人派の儒家的知識人が持っていた望ましい国家のあり方——「皇帝が外戚・豪族との妥協で統治の安定を保つ国家、具体的には後漢前期の明・章期のような治世」(p.191)——の反映が「発墨守」等三篇にあるのだとする。

「第四章 何休の思想」は、「春秋公羊伝」の注釈者として「公羊伝注」の序などから従来その歴史観などが議論されるにすぎなかつた何休の思想を、『春秋公羊解詁』そのものの中に彼の意図が少なからず込められているという立場から考察したものである。「注」という制約のある資料を丁寧に解読し何休の思想を様々の方面から取り上げた労作群であるが、まだ各論に止まり彼の全体像をまとめる論文がないのが惜しまれる。本章所収の論文が最も新しいものであり、現在の著者の興味は何休に注がれているようなので、今後の続篇が期待されるところである。

「兩漢の外戚観と何休の解釈」では、まず妾の子が即位したときの生母の処遇について、妾母の厚遇を説く左氏説、

嫡妾の区別を厳にする穀梁説、「母以子貴」の語に立脚して妾母を尊びつつ、しかも嫡妾の区別をも示し」（p.206）
両説の中間に位置する公羊説の三つの解釈があったことを示し、現実には公羊の説は「妾母・傍系出身者の帝母が大部分であった両漢時代において、それらの帝母とその一族の尊貴を理由づける役割りを、事実として果たしたのである。両漢で天子の母党の外戚の権勢を理論上支えたといつてよからう」（p.212）とする。そして何休は三説を十分に理解した上で「公羊説の内容全体を、実質的には継承」（p.217）しており、「両漢での天子の母党の外戚の尊貴は認めながら、その限度も求めた」（p.220）ものであるとする。そして彼のこうした解釈の背景には、彼が宦官達によって弾圧された党人派の一人であり、「婁克の外戚の政治勢力にも、少し期待を抱いて」（p.221）おり、こうした当時の現実への関心が禁錮中に執筆された『春秋公羊解詁』に反映しているのであるとする。

「進」から見た夷狄観」では、「夷狄進至於爵」（公羊隱元何注）という考えに注目し、何休は、華夷を厳しく區別しながら、夷狄の諸夏への漸進的な移行を認め、そこに夷狄の中国と合一しようとする意図があるとする。「公羊伝」の考えを更に一步深め、夷狄の「進」を、「中国の礼の修得やその統治者への服事の他、中国との交通も含む」（p.233）広いものと解し、「これらの事柄の根底に中国を慕う心の存在」（同）を求めていたとする。そして何休がこう考えたのは、夷狄も自然の一物であり、これを絶滅するのは自然の調和を乱すことになるという張奐の道義的主張の影響も考えられるが、課税の対象・強い軍事力の供給源といった実利の上からの要請にもよるものであるとする。

「災異解釈」では、彼の災異解釈を検討する。まず「災」——通常は起らず実害のあるもの、については公羊等の先人の説に従っているが、「異」——通常は起らず実害のないもの、については彼独自の解釈が加わっているとする。それは、将来起ることの先がけ、未来への警告なのだが、当事者の自覚や努力次第で凶から吉へ転じうるものであるという。そして何休が「異」をこう解釈したのは、「春秋」という仮定の話の中で、悪から良への転換を強調したものであり、そこにはそうでない現在への批判と諦め、又将来への期待を持つとうという意図が感じられるとする。

「第五章 道家思想」は、前章までが漢代における儒学の諸相を論じていたのに対し、道家思想を取り上げ、両漢思想におけるそのあり方を考察する。

「『鵬鳥の賦』と『莊子』」では賈誼の「鵬鳥の賦」を取り上げ、人間には不可知な「命」「道」や、衆人を超えた

真人を説くなど世俗を超越した理想を求めているようでありながら、一方では現実世界とそこでの価値を否定しないという一見相入れない考えを併せ持つこの賦の根底にあるものを、賈誼の行動・言動をも考慮に入れて考察する。まず彼がこの賦を作った背景を検討し、「服賦」において、生への執着を断ち切り、生と死とをひとしく見なさなければならぬ必然性が、個人的にも時代的にも、賈誼には見出せない（p.273）とする。そして「服賦」が「命」「道」を不可知としながら、他方でこれらとのかかわりを説くのも、あくまで現実の世界（正気・常識の世界）に立脚した上で超越の世界（狂気へも展じうる世界）を構成したため（p.274）であって、この賦の解脱とも見える超越的なあり方は、「文芸としての遊びの世界の材料」（p.276）なのであるとする。つまり、「服賦」は『莊子』の超越の思想に現実を離脱せぬよう手を加えた上で、それを文芸の領域で生かした（p.277 p.278）ものであり、儒教体制の漢代における『莊子』の思想の受容の一つの形態であったのだとする。

「武帝期の黄老派汲黯」は、武帝期に黄老派的無為の治で功績をあげた汲黯について検討を加える。まず彼の無為の治の有効性は実務家としての面の裏づけがあって發揮されていた、「つまり、状況の十分な把握、その上での確実な見通し、といったものに支えられた無為の治であった」（p.282）とする。また彼には遊俠好み、剛直で直諫を好む硬骨漢の面があったとし、こうした彼が批判、攻撃したのは張湯ら法術家官僚、又、彼らと結びついていた公孫弘、兎寛ら当時の儒者達であり、実は彼らの背後にいた武帝その人とその政治そのものなのであったとする。

前節までと異なり、思想上あまり大物とはされていない複数の人物の行動を集約的にとらえ、考察したもので、（二）における田蚡らの位置づけにやや不明瞭さがあるものの、現実感の高い、説得力のある論であるといえよう。

「後漢の道家思想」は、後漢の道家思想のあり様を、当時の人々の処生、実践の面から考察する。まず光武帝が統治に用いた「柔道」とは、「自制して人心や状況に順応すること」（p.303）であり、「現実における成功を目指す『老子』的な考えを裏面に包み持って表面は「仁の助け」という形」（p.304）をとったものだとする。次に様々な「朝廷之士」「山材之士」の行動・言動を検討、ここでは『老子』の思想が現実へ能動的にかかわる根拠の一つとみられ、『老子』の説に従うことと儒家的であることが必ずしも矛盾とは考えられていなかったこと、現実からの逃避も考えられていたが、それは生命の為であり、子孫への世間的な措置を終え、後は自らの余生を確保すればよい限りでの現実の放

棄にすぎなかったことを指摘する。そしてこうした考えの根底には、人間の生命力をそのまま認める、生命主義と呼ぶる立場があったとする。『莊子』の理解・受容に関しても「生命主義の傾向とは対立せず……生命の保全の確保の上に生死を含む全てを等質視するような、いわば重層的な論理で斉同觀を受け入れ」(p.313)ていたとする。そして後漢においてこうした生命主義的老莊思想の流行を見るのは、当時の人々が前漢二百年の平安・経済的繁栄を經、生存可能の確信と生きる喜びを植えつけられ、王莽の斬新を中心とする戦乱により平和と安全の意義や重要さを再確認していた為であろうとする。

前章と同じく、複数の人物の行動を集合的にとらえた現実感の高い論であるが、主に魏普へのつながりを考慮して後漢の思想界をとらえたものとなっている。

以上本書の内容を紹介してきたが、最後に評者なりの疑問の点を二、三述べさせて戴くことにする。

まず「董仲舒を中心にした漢代の自然觀」において、著者は董仲舒を積極的に評価して、彼には自然に能動的に働かきかけようとする意識があり、「現実注視の姿勢がある」(p.19)とし、『荀子』と対比される。そして彼のこの姿勢を示すものとして水旱災などの自然災害から免れたいという切実な願いがあったことと、限田法の主張を挙げられる。しかし董仲舒が特に自然災害への対応に熱心であったという証拠は見当たらない。確かに降雨に関する議論をしたり実験を行ったりしているが、そのことは必ずしも水旱災への注目へはつながるまい。もう一つの限田法の主張は確かに政治経済的問題に現実的に答えようというものである。しかし荀子にも、例えば王制篇の広域経済圏構想など極めて政治経済的な現実注視の姿勢がうかがえる。つまり著者の挙げられていることのみによれば、現実に対する認識に関して荀子と董仲舒との間にどれほどの差違があったのかよくわからなくなる。ここは現実性の有無という比較に止まらず、彼らにとつて「現実」とは何であったのか、どういふものであったのかといふいわば世界觀の差違にまで掘り下げた考証、説明がほしかったところである。

第二点。「『白虎通』の三綱説」において、著者は漢代における三綱説の成立を考証し、「戦国期に忠と孝の問題として共に論じられていた君臣と父子に、夫婦が加わったものだろう」(p.125)とされるが、三綱と『孟子』等に既に出

ている「五倫」との関係はいかなるものなのであろうか。君臣・父子・夫婦に長幼・朋友を加えた五倫は、周代郷村社会の記憶を止めるもので儒家的倫理観の根幹の一つとして漢代に入っても考えられていたことであらう。しかしこの点、本論には触れられていない。

また三綱説をとりまく外的状況として「漢代は一家の内での婦人の立場が重くなつたらしい」(同)とし、それは「皇后の政治への影響力の増大や公主の特権のもたらす弊害」(同)とそれへの弾劾の存在、また小農民レヴェルでの「主婦の家庭内での経済的役割が強かつたであらうことが想像される」(同)ことなどから導き出されるとされる。しかしこれは、やや根拠の薄い論ではないだろうか。まず漢代に入つて皇后等の力が増大したという点が疑問である。確かに呂后は一時期権力を握つたが、これは草莽期の臨時の措置であり、このことが漢代において例えば唐代の前期のように後々問題となつていった形跡はない。また外戚や公主の弊害をいう意見が多く出されたことは、知識人をはじめとする思想界・精神界に女性(婦人)の立場を重くみる見方が存したことにもつながるまい。なぜなら彼らが攻撃したのは弊害をもたらすものに對してであつて、それが女性であるということが特に問題視されてたとはいえないからである。また庶民レヴェルの主婦の立場についても、堅固な論に裏づけられておらず根拠の薄いものである。

このように考えてくると、漢代に入つて夫婦婦人が特に注目される外的要因はあまり見出せないことにならう。三綱説の成立の解明には、「二から三」のみではなく、前述の五倫を考慮した「五から三」という見方も併せて考える必要があるだろう。

第三点は「兩漢の外戚観と何休の解釈」について。著者は「何休の頃、党人派の知識人達にとって現実の大きな問題は、彼らを抑圧する宦官勢力の存在だつたらう。この勢力に對抗しうるのはやはり外戚であつたに違いない」(p.221)とし、「(何休)には現実への関心がかなりあり、それが禁錮中に執筆された『春秋公羊解詁』に反映しているに違いない」(同)とされる。ここではまず、当時の錯綜した政治情勢の中で宦官よりの圧迫が、その弊害も指摘されていた外戚勢力への接近へとつながるのだからかという疑問が生じる。この点は第三章第四節の鄭玄をとりまく現況の解説の部分(p.180~p.190)を参照することによりある程度は了解しうるが、政治史の動きをもう少し丁寧におさえてほしかつたところである。

また弾圧・禁錮ということだが、それは何休にどれほどの被圧迫感を与えたのか、またそれが著述の中にどれほど反映されるものだろうか。例えば趙岐の『孟子注』の場合は、「孟子題辭」によれば逃亡中の苦痛の中で書かれたものというが、その著述活動そのものはむしろ彼に心の平安をもたらすものだったという。著述活動や著作と著者の個人的事情との関連などは、個別的に慎重に考える必要があるだろう。これは論語に倣って作られたという楊雄の『法言』や、許慎・賈逵等の經典解釈の場合も同様であろう。

以上指摘した点と関わることだが、本書全体を通してもう少し説明が欲しかったのが、「現実」ということである。著者は思想をそれととりまく状況（社会もしくは現実といつてよからうが）との関わりを考慮して考察される。しかし本書において現実社会の様相についての記述が一部を除いて少なく、著者の抱いておられる当時の社会のイメージがごく断片的にしか伺えず、現実社会の大きな潮流が見えてこない。また「現実的」といえば、中国の思想家は何がなし「現実的」であるといえる。問題はその中身である。つまりその人・思想にとって現実はいかなるものであったのかが問題とされねばならないだろう。こうした点、第五章の第二・三節で試みられている複数の人物の行動を集合的に取り上げ論じるという方法を、道家思想のみに限らず儒家側の人々、それも主流とされる人々において取った論文が本書に収録されておれば、評者の抱くもどかしさも氷解していたのではないかと思う。

思えば著者には九大の研究会に遙々足をお運び戴き、評者等の後学に数々ご指導・ご鞭撻を賜わってきた。評者が浅学非才を顧みず書評などはおこがましい一文をものにさせて戴くことにしたのも、一重に著者よりの学恩にむくいたいが為であった。それ故礼を失せぬよう全力を注いだつもりであるが、理解力の欠如のため、本書の的確な紹介・評価のできなかった点、また浅学ならではの疑問を述べた点、著者のご寛恕を冀う次第である。